様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２２９９

研究課題名（和文）演劇研究における録音資料分析：バーナード･ショー作品を用いて

研究課題名（英文）Sound recordings in theatre criticism and scholarship: productions of plays by Bernard Shaw

研究代表者
八木　斉子（Yagi, Naoko）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：１０３３９６６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、バーナード・ショーが著した演劇作品を録音資料から分析し、それを媒介として、演劇研究における録音資料分析の重要性に新たな知見を与えることであった。「現代」イギリスおよびアイルランドを舞台とした演劇作品6つに対象を絞り、録音資料はロンドンの大英図書館サウンド・アーカイヴ所蔵のものとした。分析工具は研究代表者の耳であったため、記録には文字あるいはそれに準じた記号を用いた。分析結果の一部を雑誌論文2本として発表した一方、新型コロナウィルス感染拡大によりロンドンへの出張を数回断念した。最終年度には音声学・音韻論と隣接領域をめぐる図書の共著者となり、そこでは『ピグマリオン』を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　劇場録音およびラジオ劇として放送された録音は、演出家、役者、プロデューサー、エンジニア、その他が「書かれた文字」（ショーが著した台本）を各人および共同で解釈し3次元化したものである。つまり、「書かれた文字から変換された音声空間」である。録音資料の詳細な分析を介して本研究が明らかにしたかったのは、3次元化される前の「文字」と3次元化された結果の「音声空間」との間に研究対象としての優劣は存在しないこと、両者は互いを補い合いながら互いの解釈を深め合うこと、そして、両者が車の両輪として成立して初めて演劇研究は真に総合舞台芸術研究となり得ること、であった。

研究成果の概要（英文）：Focusing on Bernard Shaw's plays in text and production, this study attempted to shed new light on how meticulous analyses of sound recordings might further the advancement of Shaw criticism and scholarship. To that end, plays for analysis were limited to six that set their narratives in “present”-day England and Ireland, while sound recordings of productions of the six plays were to be sought in the archives at the British Library. Recordings in the archives were non-duplicable, which meant that analyses were conducted by use of a natural language. Some of the results of the analyses of Mrs Warren's Profession and Man and Superman were published in journals. Two of the other four plays were left unexamined due to the cancellations of trips to London under coronavirus-related travel restrictions. A modification to the scope and methodology of the study enabled a chapter contribution, on Pygmalion, to a book edited by two leading phonologists. The book will be published in autumn 2021.

研究分野：演劇学、英文学

キーワード：バーナード・ショー　演劇　録音　『ウォレン夫人の職業』　『人と超人』　『ピグマリオン』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

通常、ショーの作品群は近現代英文学という枠組み内で研究され、そこでは「書かれた文字」を解釈する作業が中心となっている。確かに、ショーが劇作家であったと同時にジャーナリストとして名をはせ、思想家としても活動した事実を思い起こせば、彼が縦横に使いこなした「文字言語」を彼が生きた時代の特徴と照らし合わせながら読み込むという切り口はショー研究の王道といえる。しかし、これまでに別の切り口がみられなかったわけではない。特に、ショーが活動した時期と欧米において録音技術・放送メディアが誕生し発展した時期とが一致するという事実に鑑み、ショーと録音・放送との密接かつ複雑な関わりを論じた先行研究が存在することは注目に値する。その代表格と呼ぶべき *Bernard Shaw and the BBC* (L. W. Conolly 著、University of Toronto Press、2009 年）は、イギリス公共放送 BBC がいつどのような方針・企画でショーのスピーチを録音し放送し彼の演劇作品をラジオ劇化し放送したかを網羅的に紹介・分析している。また、ショー自身のひとかたならぬ「音声」への興味は、彼が著した演劇作品群のうち興行的に広く知られている『ピグマリオン』（*Pygmalion*）において言語音の「矯正」がその是非をめぐる問題を含めてのテーマとなっていることからも明らかである。さらに近年、ショーのスピーチ録音が盛んにデジタル化され、ショーと録音との関わりを 21 世紀に生きる我々が実際に耳で確認し追体験することが容易になった。ショー研究が今後も進展し続けるためには「書かれた文字」が研究対象の中心であるという伝統的な姿勢に柔軟性を持たせる必要がある。つまり、「書かれた文字から変換された音声空間」にも研究対象として同等の地位を与えるべき時期が来たと言えるであろう。本研究の出発点はここにあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、ショーが著した演劇作品を録音資料から通時的に分析し、それを媒介として、広く演劇研究における録音資料分析の重要性に新たな知見を与えることであった。

ショーと録音・放送との関わりを扱った先行研究は主としてジャーナリズム論・メディア論・ジャーナリズム史・メディア史の範疇に入るものである。また、ショーの執筆活動はフィクションとノンフィクションという 2 種類のジャンルを俯瞰する幅を持っていたため、彼と録音・放送との関わりをめぐる研究においても両ジャンルが交じり合う形で議論されるのが通常である。そこで、本研究は次の 3 点を新たな特徴として掲げた。1）ショーに関する録音資料そのものを詳細に分析する。2）研究対象ジャンルをフィクションとし、さらにショーの作品群を通時的に捉えた場合に軸となる数点の演劇作品へと対象を絞り、劇場録音およびラジオ劇として放送された録音を分析する。3）録音を資料として分析する手法が広く今後の演研究に不可欠であることを示す。

本研究が「書かれた文字」を傍系に置かなかった点を強調したい。劇場録音およびラジオ劇として放送された録音は、演出家、役者、プロデューサー、エンジニア、その他が「書かれた文字」（ショーが著した台本）を各人および共同で解釈し 3 次元化したものである。つまり、「書かれた文字から変換された音声空間」である。録音資料の詳細な分析を介して本研究が明らかにしたかったのは、3 次元化される前の「文字」と 3 次元化された結果の「音声空間」との間に研究対象としての優劣は存在しないこと、両者は互いを補い合いながら互いの解釈を深め合うこと、そして、両者が車の両輪として成立して初めて演劇研究は真に総合舞台芸術研究となり得ること、であった。

３．研究の方法

本研究では、多数のショー作品をメディア論的に概観するのではなく、作品を厳選したうえ、その録音資料を詳細に分析することを主眼とした。次の要領で研究をおこなった。1）録音資料はロンドンの大英図書館サウンド・アーカイヴ所蔵のものとした。2）対象となった録音資料は館内備え付けのコンピュータでのみ聴くことができるものであり、ダビングおよびダウンロードすることは勿論許されておらず、館内のブースで自分の耳だけを頼りに繰り返し聴き分析した。研究代表者はかつて大学院生として音声学を専攻していたため、耳で聴いた音を記録・分析する作業には既に慣れ親しんでいた。3）音を 3 種類（言語音・音楽・効果音）に区別したうえ、各々の特徴に応じて分析するという手法をとった。4)分析工具は研究代表者の耳であったため、記録には全て文字あるいはそれに準じた記号を用いた。5）同アーカイヴの所蔵状況によっては単一作品について複数の録音資料を分析することが可能であり、研究に比較分析的な側面を持たせることができた。

作品を選ぶにあたり、基準を次のとおり定めた。1）ショーの最も初期の演劇作品群は 1890 年代に初演され、1920 年代までには代表的な作品が出揃ったことに鑑み、本研究で対象とする作品をその期間内から選ぶ。2）作品の長さに関しては、2 幕以上で構成されたものに対象を絞る。3）ショーが著した演劇作品群の舞台は古代エジプトから 20 世紀中葉ヨーロッパにいたる幅を持っているが、本研究で扱う作品は全てイギリスおよびアイルランドを地理的な舞台とし初演時からみた「現代」を時間的な舞台としたものに限る。

以上の条件を満たす作品 6 つ（「研究成果」欄で詳述）を分析対象とした。このうち、2 作品が 1890 年代、2 作品が 1900 年代、そして残りの 2 作品が 1910 年代に執筆され初演されたものである。時の経過がもたらしたと思われるショーの文体の微妙な変化を見逃さずに研究を実施することができるよう、可能なかぎり年代順に作品を取り上げることとした。

４．研究成果

交付申請時の計画に則り、初年度（2017 年度）においては研究の素地を固め、それ以降の年度（2018、2019、2020 年度）を通じて実際に録音資料を聴き分析した。

文献を入手し読み解く作業を集中的におこなったのが 2017 年度であった。文献の種類をショーによる著作、ショー研究、音と空間に関する研究の 3 種類に大別した。読み解くにあたって特に意識した点は、フィクションとノンフィクションをともに俯瞰する幅を持っていたショーの執筆活動を偏りなく掴むことであった。つまり、以降の年度から分析対象として扱うことになる演劇作品を中央に据えて読み解くのではなく、ショーによる他ジャンルの著作およびそれらに関する研究論文にも同等にあたり、ショーの演劇作品が他ジャンルの著作とどのように絡み合っているのかを問うことであった。文献を読み解いた結果、「書かれた文字」として解釈するかぎり、両者の繋がりは容易に認められることを確認した。同時に、果たして録音資料分析によって例えばショーによる音楽批評と演劇作品との繋がりを明示できるのか、といった問いが新たに生まれた。

2018 年度には、まず、録音資料分析の手法を確認し、修正すべき点は無いと判断した。夏季休暇中に大英図書館が所蔵する録音資料を聴き分析した。本研究では、原則として、古い作品から順に検討する方針であったため、この年度での対象作品は『ウォレン夫人の職業』（*Mrs Warren's Profession*）と『キャンディダ』（*Candida*）であった。前者は録音資料の数において豊富であったため、聴く時間と分析の大半を当てた。言語音・音楽・効果音の 3 種類に音を区別したうえ、各々の特徴に応じて分析をおこなった。その結果にもとづき、『ウォレン夫人の職業』の 1947 年録音を中心に検討する論文を英文で執筆し、これは年度の終わりに査読付き学会紀要に掲載された（"Auditory 'Settings' in a 1947 Production of Bernard Shaw's *Mrs Warren's Profession*"、『英文学』105 号）。論文では、1947 年録音が登場人物達の舞台における位置および互いの距離とその変化を言語音と効果音の工夫で表現していること、つまり、「書かれた文字」によって直接また間接に指示された事柄を当時の技術で可能なかぎり忠実に「音声空間」へ転換させていることを明らかにした。

2019 年度には、夏季休暇中に大英図書館で録音資料を聴き分析した。この回での対象作品は『人と超人』（*Man and Superman*）であった。言語音・音楽・効果音の 3 種類に音を区別したうえ、各々の特徴に応じて分析をおこなった。ショーによる演劇作品群のなかで『人と超人』は音楽の重要性において傑出しているため、分析の過程では文字だけでなく記号を用いる等の工夫が必要であった。分析の結果にもとづき、『人と超人』の 1981 年録音と 1996 年録音とを比較する論文を英文で執筆し、これは年度の終わりに博物館紀要に掲載された（"Bernard Shaw's *Man and Superman* in Two Archival Recordings"、『演劇研究』43 号）。論文では、主に『人と超人』第 3 幕の劇中劇で断片的に挿入されるモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』がショー作品にもたらす正および負の効果をやはり断片的に挿入されるグノーの『ファウスト』と絡めながら検討した。年度末の春季休暇中には再び大英図書館へ出張し、『ジョン・ブルのもう一つの島』（*John Bull's Other Island*）と『ピグマリオン』（*Pygmalion*）の録音資料を聴き分析する予定であった。しかし、新型コロナウィルス感染拡大により出張を断念したため、この 2 作品については未着手となった。

上記の理由により、最終年度（2020 年度）へ向けて当初の研究実施計画を変更した。大英図書館へ出張できない状況が長引く可能性を視野に入れ、2020 年度に分析対象とする予定であった『傷心の家』（*Heartbreak House*）については未着手に留めることとした。代わりに、もともと分析対象のうちの 1 つと定めていた『ピグマリオン』を「書かれた文字」および東京で入手できる視覚・音声資料から分析する作業を始めた。2020 年度には、大英図書館への出張が全く許されなかったため、変更した計画に則って研究を続行した。音声、方言、演劇という 3 つの側面で『ピグマリオン』の再解釈を試み、特に、台本が取り入れている音声事例を 20 世紀初頭という時代背景および劇作家ショーの特異な「音声観」に絡めて分析した。その結果にもとづき、言語学関連の図書の共著者として一章分を執筆した。この図書は 2021 年 10 月刊行の予定である（都田青子、田中真一編『言語のインターフェイス（音声学・音韻論編）』（仮題）、開拓社）。

いかなる総合舞台芸術も研究対象としては極度に複雑な巨体であり、全ての構成要素をもれなく摘出し分類し分析することは不可能である。仮に芸術愛好家の立場から演劇を評するならば、幾つかの構成要素のうち自らの五感に触れたものをほぼ「直感的」に選ぶであろう。翻って研究者の立場から演劇に切り込むためには、個々の研究における分析対象を計画的に絞り込むことが重要である。本研究の当初の計画では、分析対象を録音資料に限定した。しかし、演劇研究における視覚要素の重要性についてはあらためて指摘するまでもない。今後、聴覚要素に絞った本研究の当初の計画が別の機会を得て全うされ、将来、それと対峙して視覚要素を分析する研究が計画され実施されるならば、総合舞台芸術としての演劇を研究する学問が確固たる体系を構築することに寄与するであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Naoko Yagi	４．巻 43
２．論文標題 Bernard Shaw's Man and Superman in Two Archival Recordings	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『演劇研究』	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Naoko Yagi	４．巻 105
２．論文標題 Auditory "Settings" in a 1947 Production of Bernard Shaw's Mrs Warren's Profession	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『英文学』	６．最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 八木斉子（第3章「音声、方言、そして演劇のインターフェイス：バーナード・ショーによる『ピグマリオン』」を担当）	４．発行年 2021年
２．出版社 開拓社(2021年10月刊行予定)	５．総ページ数 240頁（予定）
３．書名 都田青子、田中真一編『言語のインターフェイス（音声学・音韻論編）』（仮題）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関